
銀魂 ~ 金色の兎がもたらす嵐 ~

天野裕月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 ～金色の兎がもたらす嵐～

【Nコード】

N2021T

【作者名】

天野裕月

【あらすじ】

満月が照らす夜の歌舞伎町その町をかける少女がいた。その少女の正体とはいかに!?

第一話 金色の兎は夜をかける(前書き)

どうも！初めて投稿します文学少女です！見てくれたらうれしいです
あ、間違えた。読んでくれたらうれしいです

第一話 金色の兎は夜をかける

満月が照らす夜の歌舞伎町

その町をかける少女がいた。

金色の髪が月に照らされ輝いていた。

その少女を追いかける六つの影があった。

「待て！．．．くそつすばしっこい奴め．．．。」

男が叫んだ。

その時少女がこけた。

走り出そうとしても遅く、男達に囲まれていた。

一人の男が少女を羽交い絞めにする。

「．．．っ！はなしてっ！」

少女は必死に抵抗するが大柄な男にはきかない。

「やっと捕まえたぞ。手間かけさせやがって．．．連れて行け。」

リーダーらしき男が言った。

「離しなさいよっ！」

そう言つて少女は捕まえられてた男の腕に噛み付いた。

「いてっ！この野郎！」

男が少女を投げた。

ドサッ

少女がこけて尻餅をつく。

男が持つていた刀を少女の首にあてる。白い肌に赤い血が流れる。

「．．．．．。」

少女が男を睨みつける。

「俺はお前を連れて帰れと言われたただだ。確か無傷では言つて

なかったんだっけな．．．。」

男は言つてからニヤツと笑った。

「そんなの関係ない。」

「はあ？」

「私は目的を果たすまで帰らない。」

少女は男の目を真つ直ぐ見て言った。

「今この状況でよくそんなことが言えるな。死ぬかもしれないんだぜ？」

男が鼻で笑った。

「死なないよ。私は死なない。なんなら試してみれば？」

少女がニヤツと笑った。

勝ち誇ったような笑みだ。

「ほっいい度胸じゃねえか。試してやるよ。」

男は刀を少女の首から離し振りかざした。

その時

カキーン!!

男の持つていた刀がクルクルと回りながら地面にささった。かわりに少女の前には笠をかぶった長髪の男が立っていた。

「誰だ貴様は．．．!？」

男達が身構える。

「貴様らに名乗る名などない。弱き者を守る侍が弱き者を斬るなどもつての他だ。」

おとなしく刀をおさめぬというのなら．．．．．」

長髪の男が構える。

「斬るぞ。」

「フツ．．．たった一人でか?．．．．やれ」

男が言うとともに男達が襲い掛かってくる。

長髪の男はそれをもともせず敵を倒していく。

4人目を倒したとき後ろから攻められる。

笠は斬られたが、長髪の男はかがんでよけ、5人目を倒す。

長髪の男が振り返る。

男が後ずさる。

「．．．．．っ!? 貴様は!．．．．桂．．．小太郎．．．。」
呟く。

「指名手配犯がなぜこんなところに．．．」

「刀をおさめて去るか、斬られるか、決めるのはお前だ。」

桂が言った。

「アハハハハ！！」

男が急に笑い出した。

「何がおかしい．．．?」

「指名手配犯が目の前にいるのに逃げろってか？真選組のところに連れてきやあ、大金が手に入るってのにか？するわけねえだろんなこと．．．俺が勝つさ。」

男が言つて構える。

「そうか．．．それなら．．．」

桂も構えた。

「ダッ！！という音とともに2人がかける。

すれちがいとまった。

はたから見ればそうだろう。でも．．．

男が倒れた。

「安心しろ。峰打ちだ。」

桂はそう言つて刀を鞘にしまった。

「お主、大丈夫．．．。」

振りかえりながら言った。

だが、そこには少女の姿はなかった。

第二話 無法地帯に住む愉快的な万事屋（前書き）

お待たせしました！！第二話です！！やっとです！！更新できました！！今回は長めです！！それではどうぞっ！！

第二話 無法地帯に住む愉快的万事屋

「起きてくださーい！朝ですよ！」

『万事屋銀ちゃん』と書かれた看板がある家から聞こえてくる。

……うるさい。安眠妨害だわ。

私はそう思いまた眠りについた。

すると10分もたたないうちにまた怒声が聞こえてきた。

「起きろって言うてんだろっが！！」

そしてドカドカという物音。

……うるさい……。人が気持ちよく寝てるのになんで邪魔するのよ……。

そう思って目を閉じるが眠れない。

……人の眠気まで取りやがって……。

私は仕方なく場所を移動しようとした。すると横に積んであった漫画が崩れ落ちた。

ドサドサドサッ

あ、やっちゃった……。

『ジャンプ』と書かれた本を手にする。てかこれ全部ジャンプだ・・

ペラペラペラ・・・これが漫画・・・。

カンカンカン・・・。

足音が近づいて来る。どうやら家の住民が降りてきたみたいだ。

ヤバ・・・

私は急いで物陰に隠れた。

「何アルカ？」

女の子の声だ。

「積んであったごみが倒れたんですよ。」

今度は少年の声。

「猫がやったんだろほっとけよ。」

眠そうな男の声。

「ニ、ニヤア・・。」

苦し紛れに猫の声の真似をする。

「ほら、猫じゃねえか。帰るぞ。」

「そうアルナ。」

「ですね。」

足音が遠ざかる。

フウ・・・とため息をつき、立ち上がり、顔を上げる。

すると目の前にさっきの2人が立ちふさがっていた。

そして手にはなぜか虫取り網。

「な、何？」と私が言う前に

「つてなると思つたかああ!!」

と襲い掛かってきた。

「えええ〜!!」

反対側から出ようと振り返るが、そこに残りの1人がいた。

そしてやはり虫取り網。

「通行止めアル！観念するネ！」

襲い掛かってくる。

私は銀髪の天然パーマの男とメガネをかけた地味な少年、チャイナ服の少女にはさみうちになれ、狭い路地裏で叫んでいた。

「ぎゃああああ!!」

目の前には机がある。その机にお茶の入ったコップが一つ。
その前にはソファがあり、男が座っていた。
その右に少女、左に少年が座っている。

私は……………縄で体をぐるぐる巻きにされて動けない。
何この状況……………？

お茶出されても動けないから意味ない。

「正直に話すアルヨ。」

少女が言った。

「身のためですよ。」

少年がメガネを直しながら言う。

「お前が連続放火事件の犯人だろ？」

男が言った。

「だから違うつって言ってんでしょぅが！！」

私は間を空けずに反論した。

「犯人は最初みんなそう言うんだぜ？」

男が机をトントン叩く。

「犯人じゃなくても言います。」

「証拠はあがつてるアル！！」

少女が机をドンツと叩いて言った

。「証拠って何よ？」

。「そ、それは・・・定春が言ってるから間違いないアル！」

少女が犬（てかでかすぎ！！）の背中をバシツと叩く。

。「アン？」

定春が首をかしげる。

。「首かしげてるけど、定春。」

。「そんなことないネ！ねっ定春っ！」

少女が定春の頭をなでた。

「ZZZ...」

「ていうか、気持ちよく寝てんじゃないの。定春。」

「う、うるさいアル！テメーに気安く定春とか呼ばれたくないネ！このパクリ女が！」

少女が片足を机にドンツと乗せながら言った

。「誰がいつ何をパクツたって!？」

私も負けじと言い返す。

「テメエが今チャイナ服をパクツたって言ってるアル!!」

私と少女の間に火花が散った。

「まあまあ落ちついて二人とも。神楽ちゃん、机壊れるから。」

少年が言った。

顔が地味だと言葉まで地味になるんだな。

「なんか今失礼なこと言わなかった？」

「言っていないよ。ただ、思っただけ。」

「失礼なことは否定しないんですね。」

話を元に戻します。あなたは何故あそこにいたんですか？」

「寝てた。昼寝よ。」

「いいや嘘だな。年頃の娘があんなところで昼寝なんかするわけねえだろ。」

「たくつ、そんなの俺でも分かるよ？もっとマシな嘘つけてお母さんに言われなかったか？」

「いや、言われてないから。」
即答。

「そうアル。マミー泣いてるアルヨ。どうしてもっとマシな嘘つけないのかって。ホラ。」

少女がドアのほうを指して言った。

そこには、髪を一つにまとめた女の人がいた。

「いや、泣くポイント間違ってるから。てか誰？」

「うう……はやく自首して頂戴……千春う……」

「だから誰！？千春って誰！？全然関係ないお母さん連れて来てんじゃん！！」

「何言ってるんだ。ほおくらテメーにそっくりじゃねえか。」

男が一枚の写真を見せる。

そこには、確かに金髪の少女が写っている。
が……

「全然似てないじゃん！！てか、これ完璧偽造じゃん！！上から金色で塗ってるだけだろ！！」

「チツばれたか……(ボソツ)」

「ばれるわ！！こんな分かりやすい偽造ないから！！」

「どうするアルか？銀ちゃん。あいつ全然落ちないヨ。」

「くそつやべーな。これで騙されて落ちると思ったんだがな。」

「勝手に千春塗っちゃいましたよ。絶対怒られますって。」

「あーそこはもともとこんな色だったって言っときゃいいんだよ。」

「あんたら人をなめるのもいい加減にしろよ。」

急に、男の表情が真剣になった。

「なっ、何よ・・・急に・・・」

私は気持ちだけ構えた。なんたつて動けないもんね。

「・・・あれをやるぞ。」

男が少し間をあけて言った。

「まさか・・・あれを・・・？」

少年が驚愕したように言った。

「正気アルか！？銀ちゃん！？」

少女が叫ぶ。

「いやあれって何？」

私は冷静に言う。

三人はそんな私を見てニヤツと笑った。
ものすごくくいやな予感がする。

三人が近づいて来る。

「な、何する気よ？」

口では強がってるが、内心メツチャ恐い。

「あれっていやあ、あれだよな？」

「もうこいつも終わりアルな」

「あ、あああれが何だか知らないけど、や、やややれるものならやってみなさいよ。」

ものすごくかみかみである。

「ほお、いい度胸じゃねえか。神楽。」

「世にもないものを見せてやるネ。」

少女が私の後ろに立つ。

心構えをした時、縄がゆるんだ。

え？と思って振り向く。

その時、後ろからこしょばされた。

「プツ・・・アハハハ・・・」

堪えようとしても堪えきれない。

「さあはくアル！お前がやったアルか！？」

「アハハ・・・だからやってないってば・・・キャハハハ・・・つつつて——！！」

なると思っただかああああ！！！！」

私は、右手で少女と男の手を掴み、左手で少年と男の手を掴んだ。

「・・・入？」

「どじやあああー！！！！」

そのまま勢いよく振り回した

「ゴフッ！」

最初に男が投げ飛ばされ襖にぶつかった。

「のわぁっ!!！」

次に少年が吹っ飛ばされ男の上に転がる。

「うわぁっ!!！」

最後に少女がその上に投げ飛ばされた。

バタンッ

重さに耐え切れなかった襖が音を立てて倒れる。

「だから私じゃないって言ってんでしょっがっ!!！」

私はそう叫んだ後、逃げようと走り出した瞬間、足を掴まれた。

「はぎゃっ!!！」

第二話 無法地帯に住む愉快な万事屋（後書き）

男 銀さん

少女 神楽

少年 新八

ですっ！！

第三話 金色の兎、罪をなすりつけられる(前書き)

どうも天野裕月です。

お久しぶりです。

更新遅れてすみません!!

以後、気を付けます・・・

第三話 金色の鬼、罪をなすりつけられる

足元を見ると、少女に足首を掴まれていた。

「フフフフそう簡単に逃げられると思うなアルよ、小娘！」

「あんたも十分小娘でしょうが！！」

と、掴まれてない方の足で少女の手を蹴る。

「イテツ何するアルか！？暴力反対アル！」

「先にやって来たのはどっちの方だったかしら！？」

「僕らは一週間ずっと犯人を追い続けてたんですよ！！」

「たった一週間じゃん！！アンタに銭○警部の気持ち分かるか！？」

「何言ってるんだ！その間にも俺たちは使えない者扱い受けてたんだぞ！！」

「知るかア！それは捕まえられないアンタ達が悪い！」

私は3人に足を掴まれつつも、逃げようとドアに手を伸ばす。

「だからお前が無実だろうと何だろうと連れてって名誉挽回する（アル）んだ！」「」

「って結局自分のためでしょうがア！！」

蹴って蹴って蹴りまくる！
でも離れない。ビクともしない。

どんだけ執念深いのよ！こいつら！

そう思いながら私は叫んだ

「しかも私が無実って知ってんじゃない！何で私がアンタらの為に濡れ衣着なきやいけないのよ！？」

「良いじゃねえか！俺だって人の物（もん）窃盗してないのに、間違えられたことあんだぞ！」

男が足を掴みながら叫んだ。

「良くない！てかそれ、お前のじゃないだろ！人の記憶パクってるじゃない！完璧千春のでしょ！しかもたかが窃盗じゃないの！」

「何言ってるんだ。窃盗も列記とした犯罪なんだぞ。」

「知るかあ！人の記憶窃盗した奴に言われたくないわ！しかも少し決まってるところがさらにムカつく！」

「どうでもいいんだよ。んなこたア！窃盗と放火じゃ罪の重さも違うんだよ！」

「オイー！数秒前に言ったことと全く違うんですけど！」

「過去に生きるのはやめたんだ。俺は今から未来へ羽ばたくんだ。」

「そのままあの世まで飛んでけアホが。」

そう言っつて私は男の顔を蹴った

「ふがつ！何すんだよ！痛エだろうが！」

「わざと痛くしてんのよ！」

「Sだな。お前Sだな。」

「よく分かんないけど、普通の反応だと思っわ。とにかく離しなさいよーこのっこのっこのっ！」

蹴って蹴って蹴りまくる

そして、三バカの悲鳴を聞きながらドアにも手を伸ばす

後10?、5?・・・3・・・2・・・1・・・

指先がドアに触れた時、ドアが開いた。

第三話 金色の兎、罪をなすりつけられる(後書き)

短かったですね・・・

ほんとごめんなさい！！

以後、気を付けますんで、応援よろしくお願いします。

第四話 金色の兎、疑いが晴れる（前書き）

どうも！天野裕月です。

テストがやっと終わった！！

投稿出来て良かったです！

それでは第四話、どうぞっ

第四話 金色の兎、疑いが晴れる

ガラッ

「旦那アちつと失れ・・・」

「・・・何・・・やってんだ？」

二人の男がドアの前に立っていた。
一人は黒髪にタバコを吸い、もう一人は栗色の髪で、二人とも着物ではなくスーツを着ている。

「放火魔ネ！こいつが犯人アル！」

すかさず少女が叫ぶ。

私も我に返って反抗する。

「ちよっ・・・だから違っつて言っただけでしょうが！」

「あ？そいつならもう捕まってるぞ。テレビ見てみるよ。」

「・・・え？」

ダッシュして居間に行き、すぐさまテレビをつける。

丁度ニュース番組をやっていて、テロップには「連続放火事件 犯

人逮捕』と書かれていた。

「ほら、やっぱり私が犯人じゃなかったじゃない。」

内心ホツ、としながら勝気に言った。

「ふん、まあ知ってたがな。」

「そうネ。一人で叫んでお笑いもいとこアル。」

「もつかいぶつ飛ばしていいかな？」

拳を握り締める。

「いや、そこは素直に謝りましょうよ。」

メガネの少年が仲裁に入る。

あ、こいつは案外常識的かもしれない。

「まあ許してやってもいいアル。あれ直したらナ。」

少女がさつき壊れた襖を指した。

「直すわけないでしょ？」

「まあまあ神楽ちゃんも・・・えつと名前は？」

「え？ああ、神崎。」

「下の名前は？」

「・・・ことみ・・・神崎琴美。」

そう言った時、さつき入って来た二人の表情が変わった。

「僕は志村新八。こつちが神楽ちゃんに坂田銀時。銀さんでいいよ。」

少年・・・新八が順に少女と男を示して言った。

「なんでお前が仕切ってるの？メガネのくせして生意気だぞ。」
「そうネ！歌舞伎町の女王って何回言ったら分かるアルか！？」
「話咬み合ってるないよ。」

「つーか真選組がうちに何の用ですか？税金の取立てにでも来たんですか？あーおっかないねー」

「んだとコラ。真選組ナメてんじゃねえぞ。」

「真選組って？」

二人が口論している後ろで新八に尋ねた。

「知らないんですか？」

「え？あ・・・う、うんまあ・・・」

逆に聞き返されて戸惑いながら答える。
「まずかったかな・・・」

「善良な市民を犯罪から守る組織でイ。」
少年が横から口を挟んだ。

ていうか・・・

「何やってんの？」

私は、何やら喧嘩をしている少年と神楽に言った。

「琴美イ、騙されちゃ駄目ネ！こいつ等は善良な市民から巻き上げた税金を遊びに使ってる奴等アル！」

神楽が問いに答えず手を動かしながら叫ぶ。

なんかこの人等もうめちゃうちゃだ。

「ていうかあの・・・本当に何の用ですか？」
新八が少々呆れながら問う。

「・・・今日はオメー等に用はねえ。」

「?じゃあ何で・・・」

「こいつに用があるんでさア。」

そう言っつて少年が見たのは・・・

「え?私・・・?」

「搜索願が出てんだよ。」

「!?!?」

「心当たりがあるようで?」

少年がニヤリとして言った。

「・・・」

思わず俯いた。

「どついうことアルか?お前家出でもしてきたアルか?」
神楽がさっぱりという表情で言った。

「・・・」

私は答えられない。

「まあそついうこつた。着いてきてもらつぜ。」

「・・・ない。」

「？」

「帰りたくない。あそこへは絶対帰らない。」

「琴美……」

神楽の心配そうな声が聞こえてくる。

「……知らねえよ、んなこたあ。俺等は他人の親子喧嘩に首突っ込める程暇じゃねえんだ。そういうのは勝手にやっつけ。他人巻き込んでんじゃねえよ。」

「っ！……」

「それは言い過ぎアル！琴美だって……」

「黙れイ、チャイナ」

「沖田さん……」

「……」

「……とつとと行くぞ。」

「……」

それでもなかなか行こうとしない私に痺れを切らしたように言った。

「いい加減に……！！！」

男の言葉が途中で止まった……というか、驚いて目を見開いた。

私が男の真横を突っ走っていたからだ。

「テメツ……」

玄関を出ると手すりに足をかけ、後ろを少し振り返り舌を出す。

「琴美！」

神樂が叫んだ時には、私は手すりから飛び降りていた。

第四話 金色の兎、疑いが晴れる（後書き）

ていうかもうタイトルでネタばれしてましたね・・・
すみません。以後、気をつけます

第五話 白夜叉、過去を振り返る（前書き）

時間かかりました・・・

今回は、銀さんと琴美の過去です！

それでは、お楽しみください

第五話 白夜叉、過去を振り返る

「今日は満月か・・・」

空を見上げて呟いた。

月が、夜空にくっきりと浮かんでいる。

晴れているせいか、星もよく見える。

墓参りにはもってこいの日かもな・・・そう思いながら石段を上がる。

アレが出ませんように、とも。

いや、ビビってるとかそんなんじや無くてだな、出てきたらテンション下がるし？

まあ俺なら一瞬でドカンだけど。俺がじゃねえぞ？向こうがだからうん。

心の中で呟きつつ、墓の前で手を合わせようとしたその時、視界の隅で何かがキラリと光った。

そして、あっ、と息を飲む音。

光るものを隠そうとする、白く小さな手。

「・・・・・・・・・・」

え？嘘、何あれ？人・・・だよな？人だと言ってくれ。

忍び足で近寄る。すると、墓の後ろに隠れるように一人の少女が縮こまっていた。

少女を見てなるほど、と思う。

さっき光った物は髪だったか、と。

髪は綺麗な金色だった。月の光が当たればいつそう綺麗に輝くだろう。

少女が警戒心バリバリの目でこっちを睨んでくる。

「ガキがこんなところで何してんだ？」

そんな少女の様子を無視して尋ねる。

「散歩。」

素っ気なく少女が呟く。

「こんな時間にか？」

「う・・・あんだこそ何してんのよ？」

答えに戸惑ったのか、話をそらす。

「墓参りだ。」

「こんな時間に？」

「う・・・」

言い返してやった、とでも言うように、ニッ、と笑う。

アレ？これ主題変わってね？

と心の中で突っ込んでからはあーと呆れつつ溜め息を付く。

「お前とんだませガキだな。何歳だ？」

しゃがんで問う。

すると手を広げて前に突き出してきた。

「ご、五歳・・・オイオイ誰だよこんなませガキ生んだの。親の顔が見てみたいもんだな。」

「私も。」

ボケのつもりで言った台詞が思わぬ方向に行ったので、少し戸惑う。

コイツ・・・戦争孤児・・・じゃ、なさそうだな。

服が小綺麗だし、靴も汚れていない。

そういえば、コイツから外の匂いがしない。

埃っぽい部屋の匂い。まるで、ずっと物置きに閉じ込められていた人形のような・・・

なんてな。妄想もいいところだ。

俺は少女の頭に手を乗せて言った。

「何だ？オメー家出でもしてきたのか？さっさと帰んな。心配してんぞ。」

「誰が？」

急に無表情になった。

いや違うな・・・少し怒っているような、投げやりな感じ。

「誰ってオメー、親だろ。」

当然だろ？というように問うと、少女は

「・・・そうだね。親は心配するんだよね。」

と言って少し笑った。・・・哀しそうに。

その時だった。

ダダダダッ、と騒がしく三人の男達が石段を上がって来た。

一人は若く、10代前半だろうか？男と言うより青年だ。

もう二人は大柄で、俺より年上だ。

「なんだあ？」

俺に気づいた男が怒鳴る。

「オイ！その侍！金髪のガキを見なかったか！？」

「あ？それなら・・・うおっ」

急に着物の裾を引つ張られた。

少女が必死に首を横に振っている。

「つたく、しゃーねえな・・・」

「どうした？見たのか！？」

「うるせえな、それが人にモノ聞く態度かよ。知らねえよ。んなガキ。」

「本当か！？嘘じゃねえだろうな。」

男が疑わし気に聞いてくる。

「だから知らねえつつってんだろ。シツケー奴は嫌われるぜ。」

「チツ行くぞ」

青年が言った。

「こいつがリーダーか・・・」

「そう思った時だった。」

今まで墓の後ろで縮こまっていた少女がいきなり立ち上がって男達の前に進み出た。

「オイ、お前……」

止めようとする俺の手をスルリと抜け、少女は男達の前で止まった。

「居たぞ！！よくも嵌めてくれたな！！このっ」

一人の男が少女の手を無理矢理引っ張り、顔に平手打ちをした。

パンツ

静かな墓地に、それは大きく響いた。

少女が尻もちをつく。

「チツ、ほら早く立たねえか。」

そう言っつて、少女を無理矢理起こそうと引っ張る手首を、ガツ、と掴む。

「な、何んだ、テメー」

メキメキメキ

強く握りすぎたか、手首が悲鳴をあげる。

「うっ……離せっ！！」

仕方なく離すと、男が手首を抑えた。

「ガキ相手にやり過ぎなんじゃねえの？ビビってんじゃねえか。」

少女は震えていた。泣くのを我慢するように、唇を噛んで。

「テメエにガタガタ言われる筋合いはねえよ。そのガキを渡せ。」

一歩前に出て、青年が言った。

「渡せねえな。テメー等にガキは育てられねえ。」

「へっ、よく言うぜ。刀差してるってことは攘夷志士だろ？人殺し風情がガキ育てられると思ってるのか？」

後ろで、えっ、と息を飲む音が聞こえた。

人殺し、ねえ……

「確かに……こんな血の匂いが染み付いた手じゃガキは触れねえ・
・でもな、テメー等みてーな冷たくて汚え手で殴られて平気な程
ガキは丈夫じゃねえぜ。」

いきなり、少女が着物の裾を掴んだ。手が震えている。

「平気っ……だよ……っ……私は平気っ……だから……もう……やめて……」

「お前……大丈夫だ。俺ア死なねえよ。」
頭を撫でる。

昔、先生もよくやってくれたな。
熱が出た時とか、夜眠れなかった時とか。

そんなことを思い出しながら、少女を傷つけてしまわないように、そっと撫でた。

すると、少女はもう大丈夫だと言うように笑った。

「ふん、すっかり懐いちゃって……まあこの際だから言うておく。今すぐ戻って来ないと……そいつ死ぬぞ?」

「!?!?」

何時の間にか、他の二人の男に周りを囲まれていた

「おうおう怖いねえ。俺と殺り合おうってか?やめとけ。死ぬぞ。こっちは現役なんだぜ」

「フン、それはこっちも同じさ。……殺れ。」

男達が刀を抜いて一斉に襲いかかってくる。

2対1

不利だと思われた勝負は、直ぐにケリがついた。

俺の手によつて。

「オイオイこんなもんかよ。話にもならねえ。」

抜いた刀を仕舞つて呟く。

「お前……まさか……白夜叉……」

青年がその名を呟いた。

少女が俺の後ろで、白夜叉？、と首を傾げている。

「銀髪に白い……そうか……お前が……あの人の……」

青年が今更気づいたというように目を見張る。

あの人、という言葉に違和感を覚える。

まるで、親しい……愛しい誰かを呼ぶような……そんな気がしたからだ。

「あの人って誰だ……？お前、まさかかん……」

俺は、途中で言葉を区切った。

それ以上言つなと、男が目で制したからだ。

視線の先には、話に、というか男達のアイコンタクトについていていない少女が居た。

金髪の髪。

蒼い瞳。

同じだ。

何もかも。

あの人と。

昔、松陽先生が亡くなるほんの数時間前、偶然出逢った少女と。

数カ月前、俺達のいる戦場に現れ、娘を護るのだと、絶対に死なせはしないのだと、誓った女と。

女は夢視だった。

未来を見据えることの出来る巫女だ。

その女は、自分の視た未来を変えるために俺を頼りに来た。

娘を、自分の愛する者を護ってほしいと俺に言ってきたのだ。

俺が？

今現在、戦場に立ち多くの命を奪ってきた俺が？

命を護る？

出来るわけない。

そう思った。

でも、面白いかもしれない。

今まで命を奪ってきた俺が命を護る。

護り通せたということは、誰かを護れる人に成ったということだ。

護りたい。

大切な人を護れる人に成りたい。

松陽先生が亡くなった後に、何度も願ったこと。

『貴方なら大丈夫よ。私が保証するわ。』

女は、ぺったんこの胸を反らして誇らしげに言うのだ。

『というか、護れなかったらでこピンだから。』

お前はもうすぐ死ぬんじゃないのか？と問うと、

『クスツ、そうね。でも平気よ。この世には幽霊と云うものが存在するのよ。』

そう言つて、俺を脅かした。別に、ビビリやしなかったけど。

『でもそんなことしなくても貴方なら大丈夫。だって未来がある。少しだけ教えてあげましょうか？』

悪戯っぽく微笑む。

上等だコラ、というと、女は俺のでこに手を当て、目を瞑った。

数秒後、フツ、と目を開けて言った。

『貴方には仲間が出来る。そう、沢山の仲間が。チャイナ服の可愛い女の子とか、メガネのしっかり者の侍とか・・いっぱい、とにかく一杯なのよ。その仲間を支え、時には支えられて色々な困難を乗り越えていくわ。何その顔？私の話を信じられないの？この・・・』

回想はそこまでだった。

青年が突然笑い出したからだ。

「？」

「ククツ・・白夜叉・・会ってみたいとは思ってはいたが・・ククツまさかこんな風に会えるとはな・・クハハハツ面白い・・面白いぞ。」

「あ？何言ってるんだ、オメー？」

「いや、何でもない。勝負を続けようか。っと、その前に名乗っておく。俺は藤原奏樹。そのガキのお世話係だ。」

「!?!」

藤原奏樹
お世話係

その単語にまた過去の、女の台詞が蘇る。

『私のお付け目役でね、藤原奏樹って子がいるんだけど・・・この子がまたシャイで。お話ししようとするときすぐ顔赤くして俯いちゃうの。それが可愛くてね、頬をちょんっ、とつつくと肩をビクうつ、てさせてさらに赤くして飛び上がるのよ。私より5歳くらい下かしらね？未来では娘のお世話係よ。無口で誤解され易いタイプだけど、しっかり私達の味方だから安心してね。彼は信頼できるわ。これも私が保証する！』

何が無口だ。アンタに惚れてるからじゃねえか。超純粹で健康的な男の子だよ、コンチクシヨー！

それにさっき言った、『あの人』
明らかに女のことだ。

と、云うことはこいつが藤原奏樹・・・

じゃ、何故俺と戦おうとする？
味方じゃなかったのか？

確信と生まれてくる疑問

その答えは、いたく単純だった。

少女だ。

あーったく、しゃあねえ。乗ってやるか。

「俺は攘夷志士坂田銀時。オメーの言う通り白夜叉だ。」
鞘に手をかける。

「いぞ」

ザッ

片足を引いて、腰を低くする。

「尋常に」

グッ、とを握り直す。

「「勝負!!」」

ダッ

一斉に駆けた。

相手が居合に入った時に

刀を

抜く!!

ガキイイーン！！

刀の交わる音。

ひゅんっ！

ギーン！

そろそろだな・・・

そう思つてすきを突き、青年の手首を蹴り上げる！！

ガッ

「っ！？」

ヒュンッ

刀が宙を舞う。

青年が、瞬時に刀を目で追う。

かかった！

刀を上から下へ、振りかざす!!

「!!、ぐはっ……」

ドサッ

青年が倒れた。

「峰打ちだ。」

そう言っつて、

自分も倒れる。

「!!お待さん!!!!」

少女が走り寄って来た。

「悪い……力不足。」

「そんなことないっ……!!……全然力不足なんかじゃ……な
いっ……!!」

少女が首を振りながら、叫ぶ。

「なんだ？泣いて、んのか？」

からかうように言うと、少女が涙を拭いた。

「違うもん……！泣いて、なんか……ないよぉ……」

嗚咽を漏らす。

「言つたろ？俺ア死なねえって」

少し笑いながら、少女の頭を撫でる。

「う、ん……！」

それでも泣き止まない少女を見て、苦笑する。

「……なあ、お前……家、帰んな。」

「え……！？」

そう切り出すと、少女が驚いたように目を丸くする。

「なん、で……？」

「俺は、オメーの面倒見れねえ。……お前は、一人では生きれない。」

「……」

少女が悔しそうに唇を咬む。

「……だから、なあ……力を付ける。生きるための力を。」

「生きるための力……？」

「ああ、そつだ。誰かを守る為の……な。家出はそれから十分だろ？」

「……ちから……うん、付ける。頑張る。私頑張るよ。だから……お待さんも生きてね？絶対だよ！？絶対、絶対生きなきゃダメだよ！！！」

ぽた、ぽた

頬に冷たい感触。

少女の涙が頬に落ちて来てるのだ。

「わぁーってるよ。」

さすが親子だ。人のことばっか気にしやがる。

「だから、泣くな。笑え。泣き顔と笑顔じゃ世界の見え方ってもんも変わってくるだろ。」

「うん……へへっ」

少女が笑った。
きこえないけど、確かに笑ったのだ。

「ほら、早く行け。」

「うん・・・ありがとね、お待さん！」

タタタッ

そう言い残し、少女が去っていった。

「・・・もう大丈夫だぜ。」

自分も起き上がって、青年に声をかける。

むくつ、と起き上がった青年は刀を取るため立ち上がった。

「すまねえな、無理言つて。」

チン、と刀を鞘におさめながら青年が言った。

「俺もアイツと約束しちったからな・・・いいってことよ。芝居な
んぎやったことねえから自信なかったが・・・うまくいったみてー
だな。」

そう、芝居なのだ。

青年と勝負したときから全部。

少女を騙すための。

さっきも言った通り、少女は幼くて、一人で生きていく力がない。

そんな状態でこの戦争の世にほっぽりだしたところで生きていけな
いのは目に見えてる。

だから、家に帰させた。

力を蓄えるために。

その為の芝居だ。

少女は青年を自分の敵だと思ってる。

説得するより、相討ちの方が時間もかからねえし、見ず知らずの俺
が知ってるのはおかしいからな。

あと、女の意志。

「これで・・・良かったんだよな？」

青年がぼつりと呟いた。

「あ？何が？」

「いや・・・やっぱり何でもねえや。じゃあな。俺は帰るわ。」

「ん？あ、ああ。じゃな」

「後・・・」

青年が石段の前で止まる。

「？」

「あの人の頼み聞いてくれて・・・ありがとな」

それだけ言って、去っていった。

よっこらせ、と立ち上がる。

「はぁー、俺も帰るか。」

伸びをして、欠伸を一つ。

ふと、女の声が蘇る。

『この、神崎琴音様の言うことを!』

なーにが神崎琴音様なんだか・・・

その、神崎琴音様にそっくりな少女は

十年^い後・・・

憎たらしい笑みを浮かべて

俺の前から

去って行きやしなかったか？

第五話

白夜叉、過去を振り返る（後書き）

長い・・・長かった。

お楽しみいただけましたか？

コメントの方もよろしくお願いします

第六話 白夜叉、物思いにふける。(前書き)

今度はなんと!

神威が登場しますよ!!

あ、今回は現在のお話、お話

第六話 白夜叉、物思いにふける。

「はぁ・・・何とか逃げ切れた・・・」

暗い路地裏でため息をついた。

「・・・神崎琴美だね。」

「!?!?」

急に名前を呼ばれ、驚いて振り返る。

そこには、一人に青年が立っていた。

橙色の髪を後ろで三つ編みにし、少しくすんだ白いマントを羽織っている。

ヤバイ

直感でそう感じた。

ああ、そうか、こいつ夜兎なんだ。

マントの奥に潜む、鉛色の傘。

抑えようにも抑えきれない血の匂い。

これはまさしく、夜兎の匂いだ。

こいつが・・・私と同じ夜兎？

「ん？あ、そうか、自己紹介が未だだったね。俺は春雨第七師団
団長 神威。」

そして、彼はニコリと表情を変えずに言い放った。

「神崎琴美、お前を殺しに来た。」

「チツ逃げやがった。何してんだ土方、ちゃんと仕事しろや。」

「うるせえ！……たく帰るぞ総悟。」

「へいへい」

沖田さんが先に出て行った土方さんを追って去って行った。

「やっと行ったネ。全く騒がしい連中アルな。」

神楽ちゃんがドカツ、とソファーに座りながら言った。

「神楽ちゃんも一緒になって騒いでたでしょ。」

僕も神楽ちゃんの向かいのソファーに座りながらお茶をすする。

「あれ？銀さん？どうしたんですか？」

ずっと黙ったままな銀さんに、声をかける。

「銀ちゃん？」

神楽ちゃんも不思議に思ってたか、声をかける。

「・・・あ・・・？何だ？オメー等。顔近エぞ。」

銀さんが現実の世界に帰ってくる。

「銀ちゃん何か変な物でも食べたアルか？」

「大の大人が拾い食いですか？」

神楽ちゃんは遊び半分で心配そうに、僕は呆れながら言った。

「あー・・・あのさ、しばき回していいかな？君たち。そんなことするわけねえだろ？ちよっともの考えて言おうや。」

ぼりぼりと頭をかいた。

「ただ・・・昔のこと思い出してただけだ。」

今度は巫山戯まじかてではなく真剣だったので、僕らは顔を見合わせた。

「どうしよう新ハイ、銀ちゃんホントに壊れちゃったヨ。どうしたら治るアルか？」

「もう無理じゃないですか？イチゴ牛乳ばかり飲むからですね。もう取り返しつかないよ。」

「何だと！？諦めたらそこで試合終了アル！私は諦めないアルからナ！」

「オーイ新八君？神楽ちゃん？誰の頭が壊れてるって？」

ささっと、一斉に銀さんを指さす。

その瞬間、頭にげんこつを喰らった。

「「いでっ！」」

頭を抑える。

「銀ちゃん何するアルか！？こっちは真剣に銀ちゃんの事考えてるアルのに！」

「どーこがだ！明らかに悪巫山戯わるまじけだろうが！！人のことおちよくりまくってんじゃねえか！」

「じゃあ何でそんなにぼーっとしてんですか？」

「あーえーっと、まあ・・・な。」

何気に聞いた質問が効いたらしく、曖昧な返事を返す。

「怪しいアルな。これだから男は嫌いネ。隠し事はっかり。」

「お前俺の何？んじゃ、俺ちょっと出かけて来るから。後頼んだぞ

！。
」

銀さんが、突っ込んだ後、手をだるそうに振る。

「え？何処行くんですかー？おーい？銀さん？」

玄関の方を見た時には、銀さんの姿は無かった。

第六話

白夜叉、物思いにふける。

(後書き)

えー今さらですが、この話は一人称で、目線は変わりまくりですが、主人公は銀さんです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2021t/>

銀魂 ~ 金色の兎がもたらす嵐 ~

2012年1月8日00時54分発行